



## 錢高 一善

ZENITAKA Kazuyoshi

錢高組

会長兼社長

# 道州制の実現 —「枯木竜吟」の気概をもって



関経連が道州制を唱えはじめてから50年以上が経ちました。その間、内外の情勢は大きく変化し、政権与党に復帰した自由民主党にも道州制推進の動きがありますが、いまだその実現には至っていません。

国家機能の一部を広く道州に移譲するという、関経連の提唱する「分権型道州制」には、地域のことは地域で考え実行するという仕組みを構築することで地域特性に応じた住民のニーズに応えることができ、同時に、各地域の競争力が強化されるという大きなメリットがあります。

広域連携や道州制を考えていく上で一番根幹となるのは、そこに生きる「人」のことをどれだけ考えているかということです。ところが、今の道州制の議論は、すっかり政治の世界の話になってしまっている。それでは、国民一人ひとりに道州制のメリットは見えません。

個々の企業でも「顧客満足度」などという言葉をよく使いますが、われわれ経済団体の姿勢として重要なのは、その地域に住む人こそがわれわれの「顧客」であるという点を認識することです。たとえ政権が交代しても、地域の首長が替わっても、関経連として、地域の住民に対し丁寧に説明を行い、彼らが何を求めているのか耳を傾け、その思いを政府に対し代弁することが重要であると思います。

もう一つ、道州制のような大きなことを実現させるためには、過去を大切にする姿勢が欠かせません。かつて、大阪商工会議所の大西正文・元会頭が「都市格」ということを提唱しましたが、一人ひとりに人格があるように、都市にも顔があつて人格があります。人格は、その人が生まれてから今までの生い立ちだけでなく、その人を生んだ親の価値観、伝統や

文化など、過去にさかのぼったいろいろなものを継承していくものです。そのような、各都市・地域を今の形にした過去をふまえた上で、将来生まれくる人のために、今なすべき最善の方策を考えなければなりません。

また、過去は、大切にするだけでなく、節目節目で検証することも必要です。企業であれば、トップが交代するときなど、必ずそれまでの事業を検証し、その反省を生かして次のステップに進みますが、経済団体にもそのような姿勢が不可欠です。過去にやり残したことを探せずに、時代に流され、その場その場で新しいことを始めるということでは問題です。

道州制の議論からさかのぼること80年、それまで300足らずあった藩を廃止した明治政府による廢藩置県は、そこに住む人々の生活を一変させたという意味でとても暴力的な革命でした。300年の徳川幕藩体制をひっくり返すには、それだけの大きなエネルギーが必要だったのです。道州制の実現は、現代の私たちがそれほどのエネルギー、そして哲学や信念を持っているか、どれほど本気で取り組むかということにかかっています。

宋の時代に中国で編纂された仏教書『碧巖録』の中に出てくる「枯木竜吟」という言葉があります。枯れ木に風が当たると、あたかも竜が鳴いているかのように、ビュービューと音を立てる。すなわち、ありそうもないことが実現する、苦境を脱して生を得ることの例えです。道州制の実現には、まだまだ難關が待ち受けていると思いますが、「枯木竜吟」、そのくらいの気概をもってのぞむことが必要ではないでしょうか。（談）